

F-1 仙台市若林区荒浜地区

2012年1月29日(日)

報告者名	川島 秀一	被調査者生年	1934年(男)
調査者名	川島 秀一	被調査者属性	漁師

貞山堀の漁業と年中行事

仙台市若林区の荒浜は、貞山堀に面した浜辺の集落であり、堀に面して両側に家が並び、南北2つの橋によって4つの区域が分かれ、少し内陸の方に昭和50年代にできた新町を併せて形成されていた。北の橋(「深沼橋」)から北へ向かって浜側が東町(約100人)、内陸側が北町(約50人)、北の橋と南の橋(「あさひ橋」)のあいだの浜側が南町(約100人)、内陸側が西町(約150人)に分かれていた。今回の東日本大震災による大津波では、死者186名のうち、新町の83名が目立った。

荒浜は、近世はシビ(クロマグロ)の巻き網やイワシの地曳網、近代はカク網(小型定置網)や貝曳き漁、刺し網などの多様な漁業を行っていたムラであった。話者からは、特に貞山堀の漁業を中心にお聞きした。

荒浜では、南風をイナサと呼び、「情けのイナサ」とも称して、特に3月末のハツテラさん(八大龍神のこと)の祭りの日にイナサが吹き始めると、荒浜に漁をもたらすといわれていた。たとえば、3月なかばから、桜の花が咲く4月末までは、貞山堀にシラスウナギがやってきた。ヨシのそばの泥の中にいるが、頭の毛のような細かな稚魚をすくった。それを静岡県に送り出すが、茶碗1つで1万円にもなった時期があったという。

シラスウナギ漁は夜の満ち潮のときにも行なわれた。胴長靴をはいて、夜の9時前の2時間、多い時で700匹くらいを捕り、昼夜合わせて50万円にもなった。

貞山堀は淡水と海水とが交じり合う汽水域でもある。夏にはジョレンを用いたシジミ採りも盛んであった。春先や秋の満潮時の前には、魚の餌になるゴカイが白く固まって流れてきた。ハゼもボラもコイも以前はよく捕った。貞山堀は、荒浜の人々にとって、楽しみであり、生きがいの場所でもあった。

貞山堀と荒浜の人々との関わりは漁業に関わることではなかった。かつて、この集落で出羽参詣が盛んだったころ、参詣中の無事を祈願して、毎日その子どもたちが海や貞山堀で水垢離をとった。「ダイゴウ繁盛、タカモリー!」と叫びながら、水に入ったという。

初物のキュウリは「カッパに上げる」といって、貞山堀に流した。7月7日のナノカビには、7回餅を食べて、7回この堀で泳いだ。これらは、もう行っていないが、毎年、8月20日には灯籠流しがある。貞山堀で、盆に帰ってきた先祖たちを送るために、毎戸が灯籠を持ってきて、ここから海へ向けて流す行事である。

荒浜の漁師たちは、仙台新港に船を繋いでいたが、正月用のホッキ貝を採る漁のことを「オマ

カナイ漁」と呼んだ。年納めの漁として、9艘の船が組んで行う集団漁で、2日くらい沖へ出た。分け前は平等で、「仲良くするためにこういうことをしている」という。

震災後の生活

荒浜の漁師の船は常時、仙台新港のそばに係留されていたが、震災時には23艘のうち2～3艘が沖へと逃げた。15トン、17～18トンの船は震災後の火災で燃えてしまっている。話者の船の「だいよし丸」は、菖蒲田浜から200メートル沖で奇跡的に発見された。青森の船大工に来てもらい、アオヒバを用いて補修をした後、9月1日からアカガイの漁に出ている。当初は1キロ1万円くらいで50キロくらい水揚げしている。被災地の荒浜には一人で倉庫を建てて、日中はここで漁具の手入れなどを行っている。住んでいる。他にも10名くらいの漁師が道具小屋を建て、生業のために利用している。彼らの小屋には皆、共通して黄色い旗を立て、集落移転に反対している。海を相手にしている仕事であるために、毎日の天気予報などは、海のそばでなければならぬという。

話者のような集落移転に反対している人々の割合は、全体的には少数派といえるが、荒浜では「現地再建」のグループと「集団移転」のグループが、同じ仮設住宅集会所で、それぞれ「戻りたい分科会」と「集団移転分科会」に分かれて、議論を続けている。この仮設住宅や集会所は、若林区伊在字東通の荒井小学校建設予定地に建っているが、集団移転を望んでいる地域は、この荒井周辺である。また、この集会所では、「荒浜新聞」というミニコミ新聞を発行しており、荒浜の2つのグループの動きを平等に掲載している。「荒浜移転まちづくり協議会設立準備委員会」では、平成24年1月29日に「荒浜移転まちづくり協議会設立総会」を開いている。

仮設住宅ではこの集会所を中心にして、8月には初盆に立てる高灯籠を立て、13日には盆踊り、20日には「灯籠流し」を行なったが、正月は特別な行事を行なわなかった。